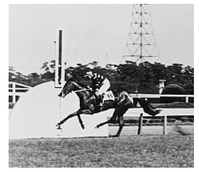

ムカシの競馬を読む

須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第121回 10年・20年・30年前の9月

いまから10年前、平成17年の9月は、名牝メジロラモーヌが死亡した月だ。競馬ブーム高揚期の昭和61年に初の牝馬三冠を達成。しかもトライアルも含めて勝つという、いまでは挑戦する者もいないであろう記録を達成している。

残念ながら直仔の活躍馬は出なかったが、ひ孫の代になってフィールドルージュがG1を制した。やはり名牝というのはポテンシャルを秘めているものだと感じさせられる。ちなみにこの年は、暦の関係でスプリンターズSが10月はじめの施行。よって9月にG1は無かった。皆さんの記憶にいちばん残っているレースというと、ディープインパクトが勝った神戸新聞杯だろう。

既に二冠を制し、無敗の三冠へひた走っていたディープインパクトは、この時点でブームを巻き起こしつつあった。そうなると競馬界で定番なのが、一般マスコミがやってきて厩舎と軋轢が起きるというパターンである。

平成17年9月17日の東スポに面白い記事を発見した。

「神戸新聞杯の1週前追い切りがあった14日、某調教師とNHKスタッフの間にトラブルが生じた。ディープインパクトのライバルの1頭として取材を受けるはずだった某調教師が取材拒否をしたのだ。『最初の質問がなぜ使うんですか？だぜ。うちのはディープの付け馬じゃないっつーの。しゃべる気にもならん。二度と来るな！ といってやったよ』」

通常の取材拒否というのはあまり誉められたものでないことが多いが、これはさすがに調教師がかわいそう。果たして誰なのか？ と思って当時の成績表を見てみたら、怒っているシーンが想像できる候補が多すぎる（笑）。皆さんも当時の成績を振り返って推測してみていただきたい。

この月には、武豊騎手が大記録を樹立している。25日の報知新聞から引用しよう。

「ディープインパクトの始動に合わせるかのように、武豊も絶好調ムードだ。24日の阪神競馬で1Rを勝利すると、エンジン全開。18日（阪神）のローズS（エアメサイア）から続くJRA騎乗機会7連勝（これまでの記録は5連勝）の新記録を達成した」

先述した神戸新聞杯の前日である。1日騎乗機会6連勝は後に横山典弘騎手と安藤勝己騎手が達成するが、この時点では初。記事にある騎乗機会7連勝も初。さらに翌日の日曜も勝ちまくり、1節（土日）で12勝というのも初めての記録だった。

武豊騎手というともっと前からとにかく勝ちまくっている印象があるが、いちばんの固め打ちはこの週。横山典騎手の6連勝が同じ年（11月、2～7Rと連続レースでもあった）、安藤勝騎手が07年なので、この時期から一流騎手の寡占が進んでいたことが分かる。

地方競馬では、例えば兵庫だと三野孝徳騎手、岩田康誠騎手、小牧太騎手、木村健騎手が騎乗機会7連勝を達成しているが、中央競馬のほうが平均出走頭数が多いことを考えると、やはり難易度は中央のほうが高そうだ。

続いて20年前、平成7年の9月。こちらはまず、よからぬニュースからご紹介しよう。9月18日付の読売新聞関西版から。

「山口組系の暴力団員らが競馬法で禁じられている馬券購入代行組織を設立、会員から馬券の購入委託を受けていたとして、大阪府捜査4課は17日、事務所になっている大阪市内のマンションを競馬法違反で捜索、3人の取り調べを始めた（中略）入会金2000円、馬券を買う手数料が1日当たり1500円で、全国から会員を募集していた」

平成17年・阪神競馬場
神戸新聞杯
優勝馬：ディープインパクト

© JRA

最近競馬をはじめた人にはピンとこないだろうが、当時は電話投票・在宅投票の会員になるにも高競争率の抽選を勝ち抜かねばならず、ウインズはある程度増設されたとはいえ常に大混雑。予想を当てる以上に「馬券を買う」という行為の難易度が高い時代だった。その状況に付け込んだものである。

記事では、

「同課は倶楽部が、会員の指示通りに馬券を買っていないケースもあるのではないかとみて、追及する」と結んでいるが、そりゃもちろん指示通りに買うはずがない。形を変えたノミ行為で、入会金や手数料を取っているぶん昭和のノミ屋よりタチが悪いというものである。

仮に本当に会員の指示通りに馬券を買いに行っていたら、大手組織の構成員が1500円でパシりに行ってくれるような話になってしまうわけで、そんなことがあろうはずがない。

馬券を買う、売るということが大変な時代だったということに絡めて、20年前からはこんなニュースも。平成17年9月6日の朝日新聞から。

「田無市の末木達男市長は、5日の記者会見で、田無市北口の『田無西武』内に開設する会員制場外馬券場『エクセル田無』の会員になっていることを明らかにした」

これが何の問題なのか競馬サイドからは分からないが、要するに場外誘致に反対してきた勢力が、「市長がエクセルの会員になっているのはけしからん」と騒いだのである。朝日新聞は「『市民感情を逆なでする』との声も出ている」と紹介しているが、どこからどう出ているのかは記さない、メディアによくある印象誘導的な報道になっている。

東京都下は革新系市民団体が強いこともあり、もともとエクセル田無の誘致にあたってはかなり揉めた経緯があった。市長と市議会の判断が割れたこともあり、遺恨も残っていた。それゆえ設置が決まり、会員募集が始まってもなお妨害工作を意図する勢力もあれば、それを支援するメディアもあったというわけである。

これがどの程度後々に影響したか分からないが、末木氏は合併で西東京市ができた最初の市長選（平成13年）で敗れている。競馬側からするとなんだか申し訳ない。さらに今回この出来事について調べていたら、原稿を書く直前の8月17日に末木氏が逝去されていたことが分かった。心よりご冥福をお祈りしたい。

最後に30年前、昭和60年の9月。ついでだから、ここも場外の話にしよう。9日付の山梨日日新聞から。

「東八代郡石和町窪中島、中央競馬石和サービスセンターが7日、オープンした。センターの予想を上回る約7000人が入場、この日1日で1億600万円の売り上げを記録した（中略）心配された交通渋滞や大きなトラブルはなかったものの、一部には、暴力団関係者、予想屋、酔っぱらいの出入りがあり、違法駐車も目立った。このため反対派住民は『監視を続ける』と、不安な様子だった」

一昨年の大井競馬（もちろん本場開催）が平均入場人員6218人だから、それ以上の数が石和に詰めかけたことになる。やはり昭和の競馬ファンは出かける手間を厭わない。だからこそどこも大混雑だった。

反対派とメディアは事件や不祥事を探したようだが目だったものはなかったようで、この山梨日日新聞が記事にしたうちのひとつが「馬券場に来た客が、急行料金を払わず駅員が110番するトラブルや（後略）」。

帰りならともかく、行きの時点で急行料金を払えない、払いたくないという状況では馬券もヘチマもない。これは場外の弊害というより、このおやじの資質や経済力の問題だろう。